



## 高松塚古墳の墳丘仮整備工事が竣工

飛鳥美人や星宿図、四神等の極彩色壁画で著名な高松塚古墳の石室が壁画の保存修理のために発掘・解体されたことは、記憶に新しいところです。古墳から取り出された壁画は、現在、修理施設内でカビの除去作業等が進められていますが、修理が完了するまでには約10年間を要することが見込まれています。その間、現地では墳丘を1300年前の築造当初の形状に仮整備して壁画修理の完了を待つことになりました。このほど墳丘の整備工事が竣工し、2009年10月24日より一般に公開されています。

都城発掘調査部では、2004年度から文化庁の委託を受け、高松塚古墳壁画の恒久保存対策事業にかかる発掘調査に従事してきました。2006年度および2007年度に石室解体とともに発掘調査を実施した後も、本年6月まで引き続き仮整備のための発掘調査を進めてきました。今回の墳丘復元は、こうしたこれまでの一連の調査成果に基づいたものです。

高松塚古墳は7世紀末から8世紀初頭頃に築造された二段築成の円墳で、下段部の直径は23m、上段部の直径は18mあります。0.354mを1大尺とする当時の基準尺では、下段部が65大尺、上段部が50大尺となります。また、北側から南東側にかけて墳丘裾を取り巻くように、幅28~4m、深さ0.4mの深い周溝が検出されました。現地では、こうした調査所見にそって墳丘や周溝を復元しています。ただし、遺構面や土層観察用の畦を保護するために、墳丘には厚さ1mの保護盛土が全面にわたって施され、表面は芝生で覆われています。

さて、実際に現地を訪れて整備された高松塚古墳を眺めると、墳丘の裾や下段テラスが南にむかってやや傾いていることに気づきます。実は、終末期古墳とよばれる7世紀代の古墳は、風水思想に基づいて丘陵の南斜面に築造される場合が多く見られ

るのです。高松塚古墳と同様に極彩色壁画が描かれたキトラ古墳でも、北側が高く南に傾斜する地をわざわざ選んで墳丘が築かれています。復元整備ではこうした点まで忠実に再現しているのです。

このほか墳丘の南東側には、昨年度の発掘調査で確認された礎詰めの暗渠も復元的に示しています。この暗渠は、石室周間に浸透した雨水を墳丘外へと排水するために墳丘築造以前に予め設置されたものです。整備では、礎の詰まった溝が墳丘裾から顔を出した状態を表現しています。

また、高松塚古墳の墳丘南側には、1975年にコンクリート製2階建ての壁画保存施設が建設され石室解体直前まで稼働してきましたが、この重厚堅牢な施設も仮整備とともに撤去されました。長らく壁画の保存対策や発掘調査・整備工事等により、間近で見学することのできなかった高松塚古墳ですが、こうして親しみやすい姿にリニューアルされました。この機会に、現地に足を運んでみてはいかがでしょうか。

(都城発掘調査部 廣瀬 覚)



仮整備完了後の高松塚古墳（南東から）

## 発掘調査の概要

### 藤原宮跡大極殿院回廊の調査（飛鳥藤原第160次）

藤原宮の中心におかれた大極殿は、東西115m、南北155mの範囲を回廊によって取り囲まれています。

今回の調査は、この大極殿院回廊の東南隅にあたり、大極殿院の東面および南面回廊と、更に東へと延びる朝堂院北面回廊との接続部分を対象としておこないました。調査面積は1,425m<sup>2</sup>。7月1日から調査を開始しています。

調査の結果、推定された位置に、回廊の礎石据付穴と抜取穴を検出しました。この場所は戦前に日本古文化研究所がトレチ調査をおこなっていますが、当時は水路や畦畔により調査できなかった柱穴もありました。しかし今回の調査では、非常に良好に残っていた遺構を、面的に検出することができました。

基壇の両端には、基壇外装の抜取溝、さらにその外側には雨落溝にあたる浅い砂の堆積も確認しました。これらの知見から、回廊の規模は桁行14尺、梁行10尺、基壇外装抜取溝の心々間距離で約8.4mとなることが、あらためて確認できました。なお、東西方向の回廊の柱間のうち、1カ所だけ桁行12尺となる場所があるほか、回廊の交差する部分は桁行、梁行とも10尺になっていました。

10月以降、秋の現場班に引き継いで、さらに調査を進めています。現在下層の調査が進んでおり、大極殿院のみならず藤原宮・京の造営過程を解明する手がかりが得られるものと期待されます。

（都城発掘調査部 山本 崇）



調査区全景 後方が大極殿跡（東南から）

### 檜隈寺周辺の調査（飛鳥藤原第159次）

キトラ古墳周辺の国営公園整備にともなう檜隈寺の調査は最終年度を迎える今年は中心伽藍の北側で6カ所の調査区を設定し、合計約1,500m<sup>2</sup>を調査しています。

飛鳥の古代寺院の一つである檜隈寺は、渡来系氏族である倭漢（東漢）氏の氏寺と考えられています。過去（昭和）におこなった調査では、渡来系技術の一つではないかと考えられている瓦積み基壇が講堂跡で見つかっています。そして今回の調査では、講堂の北西約25mの地点で、7世紀前半から中頃のものとみられる、石組のL字形カマドをもつ堅穴建物跡を確認しました。

通常のカマドが壁際に設置されるのに対して、L字形カマドとは、焚き口が室内に張り出し、さらに煙道を比較的長く壁沿いに這わせることで、その平面形がL字形や逆L字形であるものを指します。この種のカマドは日本では4世紀から8世紀に存在し、北部九州や近畿地方を中心に確認されています。また、朝鮮半島では日本よりも遅った年代のものが確認されることなどから、渡来系のカマドと考えられています。近隣の高取町では、やはり渡来系の技術と考えられているオンドル状遺構や大壁建造物跡が見つかっています。多彩な渡来系技術の遺構によって、檜隈寺はますます渡来系色を強くしています。

これまでの調査では、檜隈寺中心伽藍となる7世紀後半頃の遺構が主な成果でしたが、今回『日本書紀』に記される、遣隋使・百济大寺の造営、蘇我氏邸（甘樫丘）の警備などで倭漢氏が大活躍していた7世紀前半～中頃の遺構を確認できたことは大きな成果といえるでしょう。

（都城発掘調査部 黒坂 貴裕）



L字形カマドをもつ堅穴建物跡（南東から）

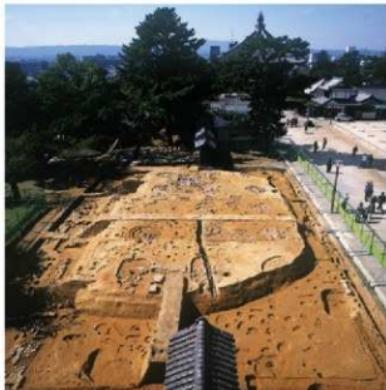
### 興福寺南大門の調査（平城第458次）

11月7日、興福寺では中金堂再建の地鎮祭が厳かに執りおこなわれました。享保2年（1717）の伽藍焼失から約300年。現在は寺觀の復元・史跡地としての整備が進んでいます。南大門の発掘調査もその一環で、2009年7月中旬より調査を開始しました。調査面積は約780m<sup>2</sup>です。

調査の結果、南大門の基壇は近代に大きく削られていきましたが、礎石とその抜取穴から、門は桁行5間×梁行2間で、東西23.1m、南北9.0mに復元できます。礎石は花崗岩で、多くは抜き取られていますが、据え直しの形跡がないことから、創建時のものでしょう。また、基壇上では金剛力士像の台石を検出しました。西側のそれらは一辺約2.8mの穴の内側に切石を並べたもので、中世の基壇改修時に力士像の台石として転用したのでしょうか。

基壇の縁辺では平安および室町時代の地覆石とその抜取溝を検出しました。平安時代の地覆石は基壇北辺と東北隅・東南隅に残り、同時期とみられる玉石敷も残存していました。一方、室町時代のそれは南階段の南辺に残るのみですが、その抜取溝が基壇の周囲をめぐっていました。なお、創建時の地覆石は遺存しませんが、その据付痕とみられる溝を複数箇所で確認しました。

今回の調査でとくに印象深いのは、一般の方々からのご質問がとりわけ多かったことです。現地見学会では2,000名を超える方々にご来場いただき、たいへん盛況となりました。（都跡発掘調査部 森川 実）



南大門全景（東から）

### 薬師寺の調査（平城第457次）

薬師寺の東院堂（国宝、1285年創建）周辺に防災設備を設置するための幅約15m、延長50mにおよぶ逆L字形の調査区を設定しました。

薬師寺東院は吉備内親王が実母・元明天皇のために養老年間に創建したと言われています。東院堂は、南向きだったものを、1733年に現状のような西向にしたという記録があり、さらに東院堂の柱間が天平尺を用いていることから、奈良時代に創建された御堂の礎石上に再建されたと考えられています。

そのような資料から、今回の調査は奈良時代創建の基壇跡をみつけるのが目的でした。そしてそれが見つかったのです。逆L字形の調査区で基壇西辺と南辺の凝灰岩製地覆石を発見しました。建物の西北隅部分にあたり、確認した基壇は東西8.2m、南北13.0mの規模があります。

基壇内部は砂砾や粘土が5～10cmごとに層をなして締め固められています。版築という工法です。縞模様にみえるはずの版築ですが、ここでは各層同じような土質のせいか明瞭ではありません。版築の底部には、親指大の河原石を一部に敷き詰めました。また、礎石を据え付けた痕跡を3ヶ所で確認し、礎石を安定させる根石もありました。礎石間の寸法は現東院堂を南向きにした場合とよく合います。

凝灰岩を用いた基壇と固い版築、丁寧な石敷きなどからみて、東院の創建時の中心建物でしょう。狙ってはいたものの、思いがけない発見ができました。

（都城発掘調査部 箱崎 和久）



版築と底部の敷石、礎石下の根石（西から）

## 二条大路木簡の世界

—736年の吉野行幸を契機に形成された一大木簡群—

二条大路木簡は、平城京跡在三条二坊八坪と二条三坊五坪の間の二条大路の路面上の南北両端に東西に細長く掘られた三条の漆状造構から出土したもので、総計は74,000点。これまで日本で見つかった中では最大規模の木簡群です。

長屋王の旧宅を皇后宮としてたまわった聖武天皇の皇后藤原光明子に関わるもので、皇后宮の警備を担当した左右兵衛府や中衛府などの軍隊の木簡と、皇后宮の活動を支えた兄の兵部卿藤原麻呂の家政機関の木簡の、大きく3群から構成されています。平城京内で見つかった木簡であるにもかかわらず、これまで平城宮内で見つかったなどの木簡よりも主権に密着した木簡群で、これに先立って見つかった長屋王家木簡35,000点とともに、日本の古代律令国家の解明に、また木簡そのものの研究に、大きな影響を与える木簡群となりつつあります。

木簡群が使用された契機は、天平8年(736)6月27日から7月13日にかけて行われた聖武天皇の吉野(芳野)離宮への行幸で、この行幸は二条大路木簡を読み解くカギになるとみられます。今回は、出土から20年を機に、2009年10月20日から11月29日まで奈良文化財研究所ガイダンスコーナーで行った「地下の正倉院展—二条大路木簡の世界」で展示した木簡の中から、この吉野行幸に関わる木簡を中心に紹介します。

(都城発掘調査部 渡辺晃宏)

行幸残金の付札兼使用記録の後の使途を記録しています。熊や鴨などの食料購入のはか、御曳御房への派遣費用、ツケの支払い、仮教行事への寄附などさまざまな用途に支出されています。

行幸の食料調達用に使った錢の残りの付札。七月十六日時点での残金と云ふ

木簡

木簡

木簡

木簡

木簡



天皇の乗物の部材の記録  
幸の準備、または後片付けに関する可能性があります。裏面の「飯糰」  
も嘗めの部材かも知れません。

大御輿 天皇の馬の部材の袋の記録 行

大法師太鼓檻 又太鼓長に裏木儀

大法師

木簡

大法

桜の花の送り状 右京四條から届けられた桜の花の送り状の一点。平城京に坂路樹として植えられていた桜の花を、漢方薬用に拾つて貯蔵したようです。同様の木簡は行幸直前の六

月八日から十四日に集中していますので、有幸に備えて薬の原料を集めさせられた可能性があります。

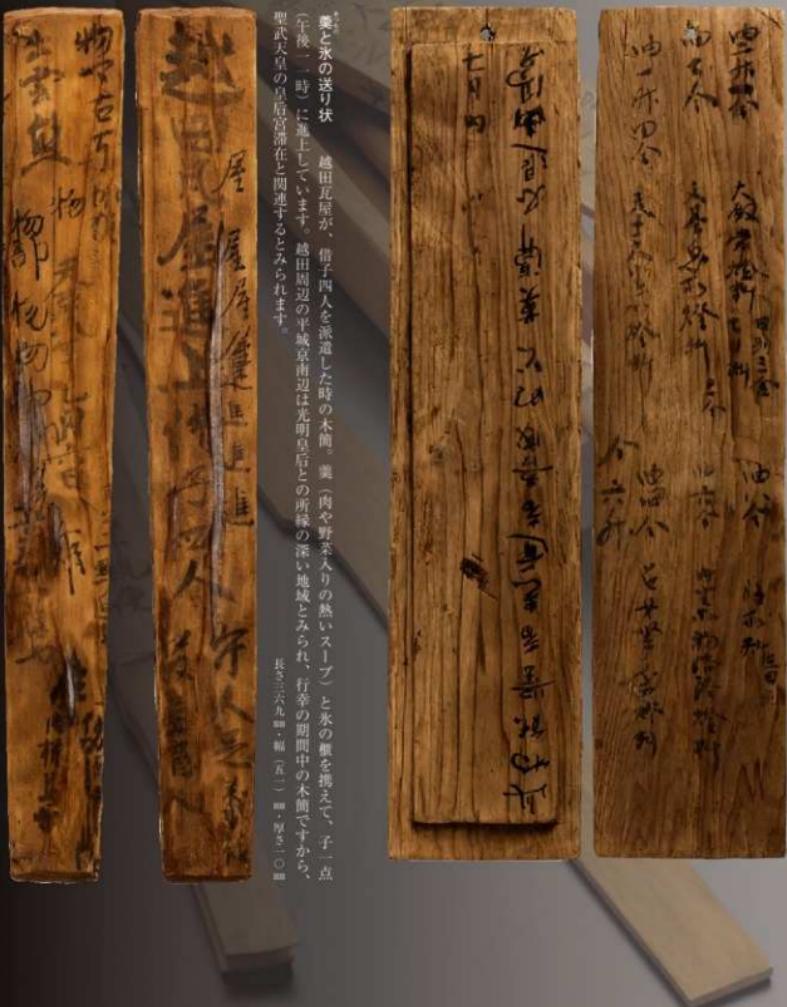
行幸制度の實質の付札。行幸終了後、使用しなかつた質料(竹を編んで作った籠)に付けた整理用の付札。使用済みのものに付けた「用質箋」と書かれたこれと対になる木簡も出土しています。

長さ三〇cm、幅五cm、厚さ五mm



聖武天皇湯在中の皇后宮の油の使用記録と天然痘除けの呪句 不要になつた文書箱の蓋を油の使用記録に再利用した木簡。行幸の帰途、聖武天皇が皇后宮に滞在した際の記録と推定されます。裏面には平城京で流行り始めていた天然痘が山陽道に退くよう祈願するまじないの文言が書き加えられています。

表三六〇・幅八〇・厚さ一五〇  
表三六一・幅八〇・厚さ一五〇



美(内や野莖入りの熱いスープ)と水の瓶を携えて、子一点  
(左後一時)に運上してます。越田周辺の平城京南辺は光明皇后との所縁の深い地域とみられ、行幸の期間中の木筒ですから、  
聖武天皇の皇后宮滞在と関連するところられます。

## モンゴル国ヘンティ県 石造文化財調査

国際遺跡研究室および保存修復科学研究所では、文化遺産国際協力コンソーシアムより支援要請を受け、2009年8月にモンゴル国のセルベン・ハールガ遺跡とアラシャーン・ハダ遺跡において石造文化財の調査を実施しました。

広大な草原の中に並んだ岩山の一つにセルベン・ハールガ遺跡は存在します。岩山の斜面上、無数に存在する花崗岩の巨岩群の一つに女真文字の銘文、他の一つに漢字の銘文が刻まれており、共に若き日のチンギス・ハンも参戦した戦の武勲が記されています。また、アラシャーン・ハダ遺跡は草原の中に残された砂岩・凝灰岩の露頭に存在します。岩壁の至るところに岩画や、様々な文字で刻まれた銘文が多数存在しており、同遺跡一帯には、未知の銘文が眠っている可能性があるといわれています。

今回の調査では、銘文が刻まれた石材の材質に関する調査や劣化状態の調査に加え、遺跡を取り巻く環境に関する基礎的な調査をおこないました。今回実施した調査結果を受けて、来年度以降はさらに詳細な調査をおこなう予定です。そしてモンゴル側の専門家と共同で、これらの調査や将来的に実施する遺跡の保存修理を実施する事で、モンゴル国に対する技術支援もおこなっていく予定です。

両遺跡が存在するヘンティ県は、チンギス・ハンの故郷としてモンゴル人にとって特別な意味を持つ地です。貴重な遺跡での保存修理を通して、モンゴル国への文化遺産保全への一助となれば幸いです。

(埋蔵文化財センター 脇谷 草一郎  
企画調整部 田村 明美)



アラシャーン・ハダ遺跡調査時のキャンプ地にて

## 平城宮東院庭園で観月会

9月26日(土)平城宮東院庭園で、奈良文化財研究所、平城遷都1300年記念事業協会(以下、「記念事業協会」)、奈良県、奈良市等が共に主催者となり、観月会をおこないました。

平城宮東院庭園が今年7月に名勝指定されたことについては既にお知らせしたところですが、一般公開されてから10年余り、今回のようなイベントが開催されたのは初めてでした。かねてよりこの古代宮廷庭園を有効に活用したいと考えていた研究所が記念事業協会に呼びかけたところ、快く賛同を得ることができ、文化庁の後援も受け、遷都1300年祭10日前イベントとして実現したものです。100名限定の一般参加抽選には2000名を超える応募があり、人々の関心や期待の高さを知るところとなりました。

当日は天候に恵まれ、きれいな夕日が沈むころに開場、天平茶や古代のお菓子をふるまいながら参加者を迎えていました。そしてあたりが夕間に包まれた午後6時、池の中央に浮かぶ復原建物は、月明かりと燈火に照らされて、幻想的な舞台に変わりました。

仲川奈良市長、玉井文化府長官および奥野誠亮記念事業協会特別顧問の主催者挨拶の後、「天平の宴」として篠笛、尺八、小鼓の演奏が囃く中をミス奈良や研究所の職員ら14名がモデルとなって天平衣装を華麗に披露しました。

後半はオカリナ奏者の宗次郎氏が、この日のために作ったオリジナル曲などを数曲を奏で、観客たちは古代宮廷の世界のひとときをこころゆくまで楽しみ、盛況のうちに終演となりました。

このたびの試みを参考にして、來たる遷都1300年祭、そしてその後の活用を考えていきたいものです。

(管理部 水井 あつ子)



中央建物で、プログラム「天平の宴」

## ■ 東アジア文化遺産保存修復学会 の開催

去る10月16日から4日間に渡り、北京の故宮博物院にて東アジア文化遺産保存修復学会の第一回大会が開催されました。今回は学会発足後の記念すべき第一回大会で、34件の口頭発表と60件を超えるポスター発表があり、参加者200名以上という盛大な学会となりました。奈文研からは、2件の口頭発表（「携帯型蛍光X線分析法による高松塚古墳壁画漆喰に関する調査」、「日本における紺色ガラス玉の変遷に関する科学的研究」）、と1件のポスター発表（「イースター島モアイ像の劣化要因と保存処理に関する研究」）による報告がありました。

本大会は「東洋と西洋の文化遺産の理念と方法の比較」、「特色ある東アジアの文化遺産の保護」などを議題とし、様々な内容の発表がおこなわれました。日中韓の3ヵ国語、さらに諸外国からの参加もあるため、英語を含めた4ヶ国語での会議です。いろいろな言語が飛び交う中で、お互いの考え方や技術について、その違いと共通性を認識しあいつつ情報交換がおこなわれました。

各国の事情は様々で、文化財の保存修復の考え方も必ずしも一致するものではありませんが、気候風土や文化財の素材には類似したものも多く、共通の課題を抱えています。本学会の活動を重ねることにより各国の専門家の間に、より多くの共通の認識が持てるようになればと思います。次回は2年後に中国で開催されます。

（都城発掘調査部 降幡 順子）



大会開幕式における学会長の挨拶

## 飛鳥資料館の秘蔵物（1）七支刀レプリカ

飛鳥資料館の倉庫には様々な所蔵品が眠っています。この中には、国の重要文化財の貴重な考古資料をはじめレプリカまで様々なものが多数あります。これらのうち、展示のために倉庫から出され、皆様にご覧頂く所蔵品は、ごく一部だと言えるでしょう。そういった所蔵品の中で、当館が所蔵する、すこし変わった資料や、なかなかご覧頂く機会が無い秘蔵のお宝を、このシリーズで紹介していきたいと思います。

今回取り上げる秘蔵物は、「七支（枝）刀レプリカ」です。このレプリカは、1967年度に加藤義行氏によって製作され、文化庁が管理していましたが、1976年から飛鳥資料館が管理をおこなうことになり、現在に至ります。

七支刀と聞いて、どのような刀をご想像される

でしょうか？ 七支刀とは、奈良県天理市石上神宮に伝わる全長約75cmの鉄製の刀で、刀身から6つ枝分かれした刃が出ており、ちょっと風変わりな形状をしています。また、刀身の表裏には、61の文字が刻まれています。千数百年前に造られた七支刀は、形状に目が惹かれますが、日本と大陸との関連を示す、最古の文字資料でもあります。実物は保存状態が良好とは言えず、銘文の一部が磨滅しており、もどかしいことに一部の文字が判読できないため、解釈には諸説あり、論争が長く続いている。

皆様は、この謎めいた七支刀に彫られた文字をどのように解釈されるでしょうか？ 飛鳥資料館に眠る七支刀レプリカも、その謎が明らかにされる日を待ち望んでいるかもしれません。

（飛鳥資料館 成田 聰）



【銘文】（表）秦■四年五月十六日丙午正陽 造百練鋼七支刀 ■辟百兵 宣供供候王■■■■■  
（裏）先世以来未有此刀 百瀧王世子奇生聖德 故為倭王■造 伝示後世

### ■ 記録

#### 埋蔵文化財担当者研修

##### ○保存科学 I（無機質遺物）課程

2009年10月15日～23日

9名

##### ○保存科学 II（有機質遺物）課程

2009年10月23日～30日

7名

##### ○遺跡地図情報課程

2009年11月17日～20日

15名

##### ○自然科学的年代決定法課程

2009年11月30日～12月4日

7名

#### 現地見学会

##### ○平城第458次（興福寺南大門）

2009年9月27日（日）

2,265名

#### 現地説明会

##### ○飛鳥・藤原第160次（藤原宮大極殿院回廊）

2009年11月29日（日）

945名

#### 飛鳥資料館 秋期特別展

##### ○展示

「北方騎馬民族のかがやき 三燕文化の考古新発見」

2009年10月16日（金）～11月29日（日）

##### ○記念講演会 於：飛鳥資料館

2009年10月17日（土）午後1時～

#### 本庁舎ガイダンスコーナー展示

##### ○特別企画展

「地下の正倉院展－二条大路木簡の世界－」

2009年10月20日（火）～11月29日（日）

#### 藤原宮跡資料室展示

### ○「藤原京跡出土木簡の展示」

2009年11月24日（火）～12月7日（月）

### 公開講演会（第105回）於：なら100年会館

2009年11月28日（土）午後1時30分～

「これからの平城宮跡－遷都1300年を迎えて－」

所長 田辺 征夫

「世界都市長安城の風景－平城京の原型－」

都城発掘調査部主任研究員 今井 晃樹

「平城京遷都の歴史的背景－日本古代都城の

出現と変質－」

都城発掘調査部長 井上 和人

### ■ お知らせ

#### 飛鳥資料館 冬期企画展

##### ○展示

「飛鳥の考古学2009」

2010年1月22日（金）～2月28日（日）

#### 平城宮跡歴史文化講座（第10回）

（NPO平城宮跡サポートネットワーク主催）

2010年1月23日（土）午後1時30分～

「近隣諸国との交わり」於：奈良県中小企業会館

奈良大学教授 東野 治之

#### 編集「奈文研ニュース」編集委員会

発行 奈良文化財研究所 <http://www.nabunken.jp/>

Eメール [jimu@nabunken.go.jp](mailto:jimu@nabunken.go.jp)

発行年月 2009年12月